

Title	南京における合唱音楽の発展
Author(s)	沈, 金云
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57846
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【41】

氏 名	沈 金 云
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 9 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	南京における合唱音楽の発展
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 根 岸 一 美 (副査) 教 授 浅 見 洋 二 准教授 伊 東 信 宏

論 文 内 容 の 要 旨

中国の 56 民族の中で、半数以上の民族の間に複数の声部による民謡の演奏実践が見られると言われるが、本論文で扱われる合唱は、西洋に由来するキリスト教の伝来とともにもたらされた教会音楽に端を発し、さらに日本の唱歌運動の影響を受けて興った「学堂楽歌」から発展してきた多声の声楽芸術を指している。本論文はこのような百年余りの時代における中国の合唱活動の歩みを、民国期以前、民国期、そして建国後の三つの歴史段階に分けて、社会、政治、文化、教育などの発展と結びつけて考察し、それを背景にして、特に申請者の活動の場でもある南京における合唱音楽の発展の道筋を系統的に分析し、各時期の合唱活動の展開における特徴を総括した研究であり、本文は3つの章から構成されている (A 4 判 192 頁)。

第1章「合唱音楽の伝来」では、中国への合唱音楽の伝来を宣教活動ルートと留学生ルートとの2つの経路に分けて概論し、またそれに基づいて、南京への合唱音楽の伝来を探索し、初期の合唱活動の展開の状況を略述し、中国合唱音楽の初期の発展において宣教師や教会学校における音楽教育からの影響がきわめて大きいものであったと述べている。

第2章「民国期 (1912~49年) の南京における合唱活動」では、まず、1931年の満州事件を境にして、民国期の前期と後期における中国の合唱発展を論述し、ここでは主に今まで学术界においてあまり注目されていなかった民国初期における合唱音楽の発展を跡付けている。続いて、民国期に首都であった南京における合唱活動を考察し、その特徴として、教会との密接な繋がりがあったこと、合唱のレベルが中国全体において上位に位置づけられるものであったことを明らかにしている。

第3章「建国後 (1949年~現在 2009年) の南京における合唱活動」では、建国後の中国における合唱音楽の発展を4つの段階に分けて概述した上で、南京の音楽発展についての考察に移り、文革前、文革中、そして文革後の3期に分けて、学校の合唱活動の展開、プロ音楽団体の合唱活動、アマチュアの合唱団体、教会の合唱活動について考察を行っている。そして、建国後から改革開放までの南京における合唱の発展は、中国の合唱音楽の発展と一致するものであったこと、しかし、縦方向から見ると、文革後の南京地区における合唱活動の展開は以前より進んでいるが、横方向から見ると、北京、上海、広州等の諸都市よりも遅れ、中国において中位のレベルにとどまっている、との所見を示している。

第4章「結論」では、この百年余りの時代における南京の合唱活動を総括した上で、現在の南京の合唱発展における問題を分析し、南京政府主催の合唱活動は、政治性が強調され、芸術としての発展に制約をもたらしているなどの問題があると述べるとともに、南京の合唱活動に存在する問題は、中国全体の合唱音楽の発展に関わる代表的な問題とも共通するとの考えを示している。最後に、日本における合唱音楽発展の経験を参考として受けとめ、中国の合唱発展にむけて必要とされるのは、合唱芸術の計画性を高めること、政治的制約を減少させること、アマチュア合唱団の定期音楽会を普及させること、そして、文化的消費意識を強化し合唱芸術の市場化・商品化を進展させることであると述べ、それらによってはじめて、中国合唱芸術には広大な未来が開けるとの提言を記している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は学業の傍ら長年にわたって合唱活動に取り組んできている申請者が、自国ならびに自身の活動の拠点としている南京市における合唱芸術の過去と現在そして未来を論じた労作である。申請者によれば、戦争や、文化大革命などの激動する状況が、文革前における合唱の発展に関する資料に多大な損害を及ぼしていることはもとより、歴史資料に対する基本的な認識不足などのために、文革後における合唱活動に関する資料も同様に失われているとのことであるが、本論文は、申請者がこのような困難な状況から資料を掘り起こし、さらに生存者から

取材するなどの努力を続けたことにより、中国の合唱発展史に関する研究の基本的な情報を提供するものとなっている。本論文に関する口頭試問は、2010年2月9日（火）、およそ1時間30分にわたって実施した。そこでは、1）合唱の活動については記述されているが、作品について、また作品に対する評価についての記述が乏しく、活動史の十全な記述のためにはそれらを含み入れるべきであろう、2）全体の記述が羅列的になっており、もう少し特定の人物をクローズアップするなどの要素もほしい、3）個々の事象の生起に関して前後の関連や因果関係の記述に乏しく、「発展」を語るための条件に乏しい、4）合唱というジャンル、また南京という都市への限定といった大きな枠組みの設定については、前提としてより大きなコンテキストの設定が望まれる、5）合唱が一つの「文化侵略」であったという可能性について、もう少し掘り下げた批判的論議もあってよかった、などの指摘が行われた。これらについて、申請者はそれぞれ十分な解答ないし理解を示し、中国における文化学術状況についての率直な批判を併せて、今後の研究への展望を示すこともできた。以上の成果により、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。